

★紹介コーナー No.3

「謎の八聖殿と歴史講座」



横浜市八聖殿郷土資料館

八聖殿を知っていますか？ 八聖殿は本牧三溪園近くの高台にある八角形の荘厳なつくりの建物ですが、長らく横浜市民をやっている人でも、「八聖殿？ ああ、あれね」と言える人は少ないと思います。たとえ八聖殿を知っていても、2階の講堂の壇上にいる八聖人が誰なのか、全部言える人がどれだけいるでしょうか…？



「Yokohama City HASSEIDEN LOCAL MUSEUM、8-SAINETS OCTAGON」の挿入写真より。
実物は高さ約 180 cm で揃えられている。

左から、キリスト、ソクラテス、孔子、仏陀、(中央に鏡) 聖徳太子、弘法、親鸞、日蓮と並んでいます。何か月前に、この事実を認識すると、何故？ 誰が？ いつ？ どうして？ と思いながらも、なぜか思考がストップしてしまいました。今回は、八聖殿で行われている歴史講座と、ストップしている思考のその先の八聖殿の本当の姿についても教えていただこうと、相澤竜次館長にお話を伺いました。この八聖殿を取り巻く話はとても広くて深く、当時の時代背景や世相を含めないと理解が難しいこともあり、歴史好きの皆様に向けての「横浜歴史サロン」として、今回は特別拡大版といたします！

(横浜歴史サロン 渡辺登志子)

八聖殿の歴史講座

横浜市の郷土資料館として運営されている八聖殿では、ほぼ毎月第3土曜日 13:30~15:00 に2階の講堂で、八聖人像を前にして、歴史講座が開かれている(受講費は資料代として200円)。また、関連の歴史散歩も催行している。毎回、100人前後の多くの参



いつも笑顔の八聖殿の相澤竜次館長(玄関口にて)



加者で講堂は一杯になり、大変な活況を呈しているが、そんな中いつも、丁寧な対応とニコニコ顔で迎えてくれるのが、館長の相澤竜次さんである。

歴史講座は、現在も講師を務めていられる曾根勇二氏の発案で、約 10 年前に始まった。現在、横浜市都市発展記念館・ユーラシア文化館の管理担当という肩書を持つ曾根氏は、横浜市歴史博物館の設立(1995 年 1 月)の計画当初から関わった方で、専門は 300~500 年前(秀吉、家

康の時代?)の日本の歴史研究とのこと。そのため講義内容は歴史といっても、開港期ではなく、それ以前の時代からの横浜市域周辺を取り巻く時代背景、地理・地形、集落や地域の形成が中心のようである。これは「開港=横浜の始まり」と思っていた横浜人にとっては、新鮮な見方であり、また毒舌や冗談を交えて、独自の歴史観を展開される曾根先生に惹かれている人も多い。10 年前に講座を始めたときは、参加者わずか 6 人だったのが、いまでは会場が満杯の盛況ぶりになり、特に、ここ 1、2 年の増加が著しい。それは、3 年半くらい前に就任した相澤館長の力によるものが大きいとの長年参加している人の声がある。(写真は、大人気の歴史講座、9 月 17 日の講座「保土ヶ谷宿近郊と帷子川沿いの村々」ではこれまでに最多の参加者 130 名)

古い建物で、空調設備のない八聖殿の講堂では、暑い夏には冷たいオシボリと麦茶が、寒い冬には温かい湯たんぽとお茶の提供があるそうだ。また、「常連さまカード」というものがあり、累積 4 回の出席ごとに 5 回目を無料で、つまり年 2 回程度無料参加できる特典がついている。こうした相澤館長の来館者に対するサービス精神と満面の笑顔はとても印象に残るものがある。

80 年前の八聖殿でも月一の講演会

相澤館長のお話から、約 80 年前の八聖殿でも月 1 回の講演会が行われていたことがわかった。「十年間の八聖殿」という本が、昭和 18(1943)年に、八聖殿創立者の安達謙蔵氏によって著書、発行されており、これには、八聖殿創立 10 年を振り返って、様々な出来事や安達氏の思いが綴られている。昭和 8 年から 17 年まで、ほぼ月 1 回のペースで著名人を呼んで講演会が行われていて、内容としては、聖徳太子、親鸞、イエスなど、壇上の八聖人に関わるものが当然多いが、「非常時日本の覚悟」、「輸出振興の根本問題」、「全国吟詠大会について」などの講演題目もある。ゲストスピーカーに加え、安達氏自身も毎回、精神修養的な題目で話をしていた。今から見ると、国粹主義的な内容も多々あるが、当時の世相からすれば、彼自身が国のリーダー的な存在だったことを考えれば、普通だったかもしれない。これを読むと、いかに彼が真剣に立派な日本青年を育成しようとしていたかが分かり、その修養の場として八聖殿を創ったと、八聖殿建設の目的が記されていた。

八聖殿とは？ 創立者の安達謙蔵とは？ なぜこの八聖人なのか？ 八聖殿はなぜここに？

八聖殿は、法隆寺夢殿を模した三層楼八角形の建物で、1933(昭和 8)年に完成した。「安達謙蔵自叙傳」という書籍の中で、安達氏が次のように述べている。「建物を八角にしたのは、聖徳太子の建立せられた奈良の夢殿に模したるものでありまして、私自身の発案であります。(p296)」また、安達氏は、宇

宙的広がりを表す「八」という数に強いこだわりがあるようで、「十年間の八聖殿」に「…天地八紘を象(かたど)りあらはすと同時に大日本帝國を代表現顕して居ります。…(中略)…世界の信仰を一小堂裡に集約して、宇宙一眞理、八紘爲宇を如実に神鏡に収蔵して…」とある。(「八紘爲宇」については下記を参照)

八聖人を誰にするかは、いろいろな高名な人が安達氏にアドバイスしたようで、結果として、外国人4人、日本人4人とし、中央の鏡(神鏡)には天皇を始め、神教の神様、皇室の偉人の方々一同が存しているとしている。相澤館長によると、マホメッドの像がないのは、イスラム教は偶像崇拜を禁止しているので、その代わりに、講堂の上部にそれらしい模様が描かれているとのことだ。

この8人の聖人の制作者すべて、当時は大変有名な人たちだった。中でも、孔子象は「長崎の平和象」の制作者として知られている北村西望氏であり、聖徳太子像は、「大隈重信像(早稲田大学構内)」、「太田道灌像(東京国際フォーラム内)」などが代表作の朝倉文夫氏である。キリスト像を制作した清水多嘉示氏は、画家としても有名で、ハケ岳美術館には作品が展示されている。神鏡を制作した香取秀真(ほつま)氏は、近代日本の鍍金分野では草分け的存在で、息子の正彦氏は「広島平和の鐘」を作った人である。その他の制作者の方々も、今ではあまり知られていないにしても、いずれも日本の美術界に大きな足跡を残した芸術家の人たちだったようだ。

安達謙蔵 略歴



安達謙蔵氏、1926年(大正15年)頃。フリー百科事典「ウィキペディア」安達謙蔵より。
八聖殿の玄関にある胸像とはだいぶ雰囲気が違う。

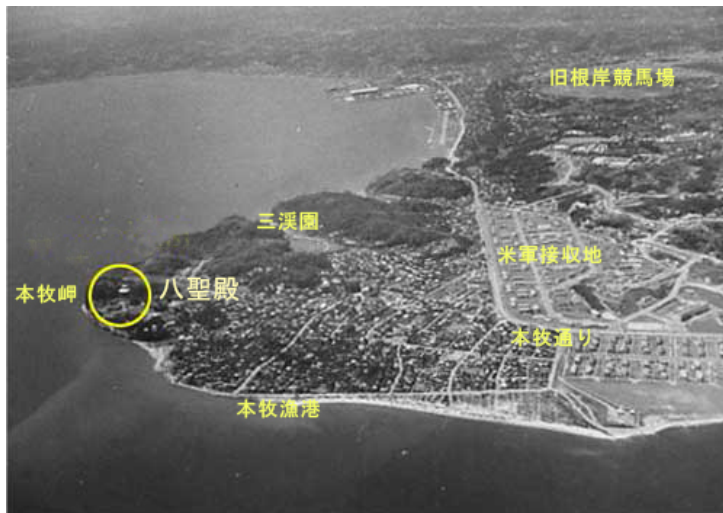
元治元(1864)年生、昭和23(1948)年没。肥後国熊本出身。新聞記者、のち政治家で通信・内務大臣を歴任。常に裏方的存在で政治に関わっていたので、あまり知られていない。明治27(1894)年、朝鮮国で東学党の乱が起きると、朝鮮半島に渡り、新聞を発行し、社長兼新聞記者として日清戦争にも従軍した。翌年、朝鮮王妃閔妃(ピンヒ)殺害計画に参加し、在韓の熊本県出身者を率いて乙未事変を実行。中心メンバーとして広島で投獄されるが後に釈放された。その後、本格的に政治の世界に入る。1914(大正)3年、第2次大隈内閣が実施した総選挙で与党立憲同志会の選挙長を務めて大勝し、徳富蘇峰から「選挙の神様」と評された。八聖殿完成(昭和8(1933)年)の1年前の昭和7年には、国民同盟を結党しているが、党勢を拡大することはできなかった。八聖殿落成後、郷里の熊本に3人の賢者を祀った「三賢堂」を建設した。戦後は公職追放となり、昭和23(1948)年83歳で熊本にて死去。

参考:フリー百科事典・ウィキペディア「安達謙蔵」

「八紘爲宇」→八紘一宇(はっこういちう)

【日本大百科全書(ニッポニカ)の解説 [古川哲史]】

神武(じんむ)天皇が大和(やまと)橿原(かしはら)に都を定めたときの神勅に「六合(くのにのうち)を兼ねてもって都を開き、八紘(あめのした)をおおいて宇(いえ)と為(せ)んこと、またよからずや」(日本書紀)とある。ここにあるのは「八紘爲宇」という文字であるが、1940年(昭和15)8月、第二次近衛(このえ)内閣が基本国策要綱で大東亜新秩序の建設をうたった際、「皇国の国是は八紘を一宇とする肇国(ちようこく)の大精神に基(もと)づく」と述べた。これが「八紘一宇」という文字が公式に使われた最初である。爾来(じらい)、教学刷新評議会で「国体観念をあきらかにする教育」を論ずるなかなどで頻繁に使用された。国柱会(こくちゅうかい)の田中智学(ちがく)もしばしばこの文字を使った。すべて「大東亜共栄圏の建設、ひいては世界万国を日本天皇の御稜威(みいづ)の下に統合し、おのおの国をしてそのところを得しめようとする理想」の表明であったとされるが、太平洋戦争における日本の敗戦によって、万事休した。



昭和 28 年頃の本牧。本牧岬の黄色の丸内が八聖殿。その上部の森と森の間が三溪園。右側の建物が整然と並んでいる地域が米軍接收地。Yokohama City HASSEIDEN LOCAL MUSEUM より

「なぜここに建てたのか？」は、当時、来訪した多くの人々の安達氏への問いだったようで、「十年間の八聖殿」によると、昭和 5、6 年の内務大臣時代に、安達氏はニューグランドホテルに週末休養に出かけ、読書に倦むと、横浜市を散策し、たまたま本牧八王子山（現在の地名は本牧元町）に足を運んだ時にこの地を見つけたとのこと、「土地の風光は全く殿堂建設に最高の適地と確信」とある。資金が足りなかった

ので、寄付を募ったところ、うまく集り、「土地の所有者たる小野哲郎、大谷嘉兵衛の二氏に特に交渉せられしが、二氏も快く承諾せられたれば約三千坪の山林及び畑地は一括して八聖殿の敷地に決定して」と、この地を獲得した。（筆者注：小野哲郎は、原富太郎（＝三溪）と並び称された生糸輸出商、横浜正金銀行の頭取もした小野光景の三男。大谷嘉兵衛は、「茶聖」と呼ばれ、茶の輸出で財を成した実業家、政治家）こうした点から、この一帯が当時は貿易等で成功した大富豪の別荘地だったことがわかる。海を見下ろしながら、大園遊会が開かれていたようだ。また、眼下に海を一望に見渡すことができることから、幕末には、江戸警備の一端として、鳥取藩が出兵、配備された。近づく外国船を崖の上から見張っていた姿が想像できる

八聖殿のその後の歴史

八聖殿は昭和 12 年に横浜市に寄贈され、安達謙蔵氏はその管理人として契約し、引き続き居住していた。（本宅は麻布）彼は昭和 23 年に郷里の熊本で亡くなっているが、その後は別の人が建物の管理をしていた。

昭和 33 年に、空襲で損傷した本牧三溪園が修復を終えてオープンする際に、八聖殿を含むその一帯を「本牧臨海公園」として整備した。しかし、三溪園が横浜市民なら知らない人はいないほど有名なものに比べ、近くにある八聖殿については、横浜市が積極的に宣伝して、人寄せをしたような気配が感じられない。その頃か、八聖殿が小学生の臨海学校で海の家として使用されていて、子供のころ講堂に泊まったことがある人が、最近、歴史講座に来た際、八聖殿を懐かしがったものの、「とても怖かった一。」と言ったそうだ。八聖人像の前で寝るのは、さぞや怖かっただろう、と想像に難くない。

「臨海」というからには当時は海が良く見えたのだろうが、今では埋立てで海岸線が遠くなってしまい海を臨むことはできない。三溪園側からの八聖殿への緩やかな坂（安達氏は「参道」と呼んでいる）の入口の石壁と、八聖殿の石門に刻まれている「本牧臨海公園」という立派な名称が、今では寂しく感じられる。

横浜市が八聖殿をあえて宣伝しなかったのは、戦後の民主主義と高度経済成長期を謳歌する当時の日本には、「怪しげな宗教」とか「特殊なイデオロギー」の殿堂と見られがちな八聖殿の存在をあまり外に出したくなかったのではないかと推測している。戦後、創立者の安達謙蔵氏が公職追放されたという不

名誉もあるかもしれない。昭和 33 年に本牧臨海公園と指定されながらも、その後昭和 48 年に横浜市
の博物館になるまで、手つかずの「ガラン堂」のようだったのではないか。

丘の上の小さな博物館 歴史と花の穴場としての現在の八聖殿

昭和 48(1973)年 11 月「横浜市八聖殿郷土資料館」と改名され、横浜市の博物館第一号となった。もとは、埋立て前の本牧の姿や人々の暮らしを残したいということからだそう。その後、横浜の歴史を伝える本格的な公共施設である横浜開港資料館(1981 年)や横浜市歴史博物館(1995 年)などができたことで、交通が不便で、空調設備もない古い建物の八聖殿には、博物館としての求心力は薄れてしまったようだ。

現在、市民に郷土の歴史を伝える資料館として、幕末から明治にかけての本牧、根岸の写真や市内で使われていた農具や漁具の展示、横浜各地で受け継がれている「お祭り」の紹介などがされている。市内の小学生が「昔の道具しらべ」や、横浜の埋立てについて勉強に来ている。小学生が様々な昔の道具を実際に使用する体験学習が好評だ。また、四季折々の花が相澤館長やスタッフの協力で育てられ、来訪者を楽しませてくれる。近所の子どもたちやお年寄りの憩いの場にもなっているようで、地区センター的な役割もしているように見える。



本牧市民公園側から来ると、この崖を上る。けっこうキツイです。道路はかつて海でした。

八聖殿にまつわるもの

「八聖殿」には、私の思考がストップしてしまったように、確かに私たちに何か躊躇させるものがある。ランダムに選ばれたように思える世界の偉人たちと日本の高僧たちが並んでいる不可思議さ、不可解さと、神鏡が中央に配置された精神修養の道場というのが、戦前の軍国主義思想を想起させ、どうにも手が付けられないと感じさせるものがある。深く知っていくと、これまで放置状態に近かった時期があったのも分からなくもない。

ここ八聖殿は、「全国吟詠大会発祥の地」とされ、記念碑もある。創立の翌年、昭和 9 年に吟詠(当時は詩吟より「吟詠」と言われていた)の全国大会が日本で始めて開催され、その後ここで何度も行われている。この詩吟・吟詠(漢詩や和歌などを独特の節回りで吟ずる(歌う)芸能、それに合わせて剣舞・詩舞を伴うこともある)は戦前までは日本の精神文化を身につけ、国威高揚に資するものと、大変盛んだったらしい。敗戦後、連合軍の占領下では詩吟は軍国調として排斥された経緯から詩吟人口は減少したが、その後、「吟詠は東洋の聖賢の教え」と主張して復活され、昭和 23, 4 年から詩吟大会が行われるようになった。八聖殿では、毎年 5・11 月頃大会が行われるという。

また、八聖人像の左脇には、八聖人とは無関係の**聖観世音像**があるが、これは鶴見にあった花月園(かつては東洋一の児童遊園地と言われた)の閉園後、どこかで保管されていたが、八聖殿が郷土資料館としてオープンするとともに、ここに安置されたという。この像の制作者は下村清時氏で、かの有名な日本画家の下村観山の兄とのことである。また、**蚕**が飼育されているが、それは**世界遺産・富岡製糸場からの依頼**がきっかけで行われるようになったそうだ。実に、多岐にわたった使われ方をしている。

八聖殿への期待、さらなる有効活用へ

しかし、横浜市民としては、八聖殿は市の財産なのに、なんだか、もったいない使われ方をしているように思えてしまう、もっと広く八聖殿を活用できないだろうかと思うが、どうだろう？ 郷土資料館として、小学生たちに昔の暮らしを教える八聖殿の役割は大切だとは思いますが、せっかく本牧にあるのだから、その特徴や歴史的背景を生かして他ではできないようなことをして、もっと多くの横浜市民を呼び込める博物館にできないだろうか。

たとえば「八聖殿 横浜本牧歴史館」として、これまで歴史講座で取り上げられた—500年前の本牧郷、本牧・根岸の歴史、本牧の古文書などや、開港期の本牧—ペリーと本牧、マンダリン岬・十二天、幕末の本牧・海防と鳥取藩、ミシシッピ湾と遊歩道、本牧別荘地の富豪たち、さらに戦後の本牧—アメリカ軍と本牧、市電と本牧、などといったこの地ならではの展示や講演会をして、歴史好きの人たちを集めたらどうか。こうしたことは、あの歴史講座に来る多くの人たちの賛同を得られるにちがいない。相澤館長が安達謙蔵氏について、さらに研究して、真の人物像に迫りたいと言われていたが、そうした発表や展示も是非してもらいたい。この際、これまで八聖殿にまわりついていた問題や疑念を払拭して、広く周知して、市民のために本当に活用できるようにしてほしい。

そのために、三溪園とともに八聖殿を含めた本牧の認知度を高めることが必要であるし、交通アクセスの利便性を改善することも必要だろう。また、建物自体の古めかしい臭い、トイレなど施設の老朽化が進んでいるので、できれば、もっと新設備にして快適にしないと、若者を呼び込むのは難しい気がする。八聖人像や中央の鏡も、せっかく著名な方々に制作してもらったのだから、専門家の手できれいにしてもらったほうが良い。こうした予算を必要とする支援は、是非、行政に望みたい。

時代が変わっていくように、歴史観も変わってゆく。歴史は過去のものではなく、常に現在の状況と密接につながっている。だから、博物館は、過去から現在へ、そして未来へ、人類の営みを伝える重要な役割がある。八聖殿の成り立ちを考えれば、当時の歴史的背景を、今に生きる人たちに正しく伝えることが必要な時期に来ているように思える。

まずは、本牧の散歩コース(八聖殿、三溪園を含めた楽しいウォーキング)を作ってみたらどうだろうか。初めて八聖殿を訪れる人たちに、どの部分をどのように説明するかは、それこそ八聖殿の相澤館長の腕の見せどころだと思う。

[横浜市八聖殿郷土資料館ホームページ](#)

参考資料:

- ・「歴史講座及び歴史散歩一覧」2016.9.17 曾根勇二氏作成
- ・「十年間の八聖殿」著者・発行者 安達謙蔵、昭和 18 年 1 月 5 日発行「国立国会図書館デジタルコレクション」
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1039336>
- ・「安達謙蔵自叙傳」新樹社 昭和 35(1960)年刊 <http://ktymskz.my.coocan.jp/meiji/adati.htm> (p55-78)
- ・フリー百科事典・ウィキペディア「安達謙蔵」
- ・八聖殿制作のチラシ「八聖像・神鏡と芸術家たち」
- ・八聖殿制作のチラシ「花月園と聖観世音像」
- ・吟詠の歴史 <http://isseikaijimdo.com/吟詠の歴史/>
- ・八聖殿の Web サイト <https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/shisetsu/hasei/>
- ・「本牧の『小野公園』—小野光景別荘—」「開港のひろば」p8、横浜開港資料館、平成 3 年 6 月 1 日